⑧からだ

違いを認めあい，生かしあう

1　研究全体テーマとからだ部テーマの関連

研究全体テーマを受け，本部会では昨年度までの研究も生かしつつ，「公共性」を子どもたちの関わりあいの中に見ていこうと考えた。そこで部会テーマを「違いを認めあい，生かしあう」とし，テーマに迫る子どもの姿を「一人一人の違いを受け入れるだけでなく，生かしあう姿」に求めて，実践を継続してきた。

実際に身体を使って動くことが主の分野だけに，この分野は運動能力の違いが目に見えやすいと言う特徴を持っている。すなわち，一人一人の個人差が大きいこと，それぞれに得手不得手があることを受け入れることから学習が始まると言ってもよい。例えばチームプレーが求められる場面において，仲間の持つ運動能力などの違いに気付き，受け入れること。その上で，その子に合った役割を見つけ，違いを良い面としてチームに生かしていこうとする姿が少しでも見られることが願いである。そのためには，自分の感情だけでなく，理性的な判断が必要となったり，チームのために自分の果たすべき役割を考えて行動したりと非常に高度な技量が求められる。発達に応じた段階を踏まえながら，子どもたちの実態に応じた指導の手立てをより充実させていきたいと考えている。

2　からだ部で育む「公共性」　～中学年を中心にして

前述したように，他の学習分野と比べて「からだ」の時間では，個人の能力差が見えやすく，また，集団に合わせた行動が求められる場面も多くなるという特徴がある。そのため，個における葛藤，集団における軋轢が様々な形で生じやすい。そこで，「子ども自らが，感情に左右されやすい自分の言動を，いかにコントロールできるようになるかを意識すること」を，「公共性」を育む第一歩と考えた。

・自分の内面から生じる「葛藤」に向き合うことのできる子どもたちを育むこと

まず，上手な友だちの姿を見て，うまくありたいと願う気持ちと現実の自分の姿とのギャップに葛藤する子ども達の心の揺れを，いかに支えてゆけばよいかを課題の一つとすることにした。それは，友だちの良さを認めるためには，まずは自分の良さに気づくことが大事と考えたからである。そこで，子どもたちが自ら自分の姿をみたり，感じたりできる場面を大切にし，それによって，子ども自身にどう，頭と心と身体のバランスを保てばいいかを気づかせるような授業のあり方を工夫することにした。

これまでの取り組みから，次のような手立てが有効ではないかと考えている。

◇　ありのままの子どもを認め，そこから一歩前へ進もうとする気持ちを大切にする

◇　自らの課題に向き合わせ，対処法を考えさせる　～小さなステップを積み重ねる～

◇　友だちの声を大切にして，自分なりの目標を見出させる　～友だちの良い所を認めあう～

特に自信をもてずにいる子どもに対しては，ありのままを認める所から始め，苦手なものの中にも楽しさや面白さを感じられるよう一緒に考え，一歩前へ進もうとする気持ちを喚起するように励ましている。それは例えば，上手に跳べないことを気にして大縄を回す役割ばかり買って出る子どもに対して，回し方のコツを教えるとともに友だちがどのタイミングで入ってきているかを意識させたり，ゲーム中に転んでくじけている子どもに「君が抜けた分，チームのメンバーが苦戦しているよ」と声をかけたり，体格の良い子どもに長めのタグベルトを用意してあげたりといった，ほんのささやかなことの積み重ねに他ならない。そのことで安心感を与え，次にどうすればよいか考えさせる。自らの課題に向き合わせ，

その対処法を学ばせるのである。さらに，それを教師が行うのではなく，子どもたち同士の関わりの中で，彼らが自然に行えるような空気を生み出していくことが必要である。そのために，授業の振り返りの場面や記録カード，見学者カードなどを活用し，友だちの良い所を認めあう時間を重視した。そこで自分自身では気がつかなかった事や，努力していたことを指摘されて，友だちに認められる喜びを味わい，他者の評価観点も知ることになり，次に頑張れそうなことやチームの中で自分ができる役割（アシストやフォロー）を見つけることができるのである。また，記録カードの「○○君のアドバイスのおかげで◇◇ができるようになった。」などのコメントは積極的に取り上げ，みんなに紹介した。このようにして友だちの良い所を認めあう，見習いあうといった雰囲気を醸し出すことが，子どもたちの「公共性」をより育むことにつながっていくのではないかと考えている。

3　授業実践からみた子ども達の学ぶ姿

(1)　低学年（２年）　「友だちといっしょにやってみよう」

①　２年生の子どもたち

１年生の時と比べ体つきがしっかりし，体力や筋力もついてきた。昨年より難しい技や長い距離に挑戦しようとする姿も多く見られるようになった。２年生では「からだを動かすことを楽しむこと」「様々な動きを経験すること」「友だちと一緒に運動することを心地よく思うこと」を重点に学習を組み立ててきた。学級だけでなく，学年全員で活動することも多く，特にいろいろな友だちと関わりながら運動を楽しむ場を作ることで，新しい発見や運動への意欲づけもしていくよう考えている。

②　みんなで考えてやってみよう　～目的に向かって

友だち同士の関わりが見え，子どもたちも協力をして取り組むことの楽しさに触れ始めている。そこで，今年度はチームとして取り組む運動を増やした。例えば，いろいろな走り方をするリレー，バトンをつなぐリレー，４人で一本の棒を持って走るリレー，ボールを転がすリレーなどに取り組んだ。初めはやり方を覚え，順番を決めてもらうので精一杯だった子どもたちだが，繰り返すことで次第に順番の決め方やチームを速くするための工夫をするようになった。一人ずつが走る責任を負う中で，「最初と最後に速い子がいいよ」「２回走るのは○○ちゃんがいいんじゃない？」とチームのことを考えて話し合ったり，我慢したりという場面も見られた。やり方が違っていた子を責めるより，教えてあげる方が効果的だと気づき，みんなの体を上手く使うことが力を合わせることだと感じる。子どもたち同士の関わりの中で学ぶものが多かったと考えている。

(2)　中学年（４年）「ジュニアホッケー入門」

①　目指したい子どもたちの姿

「できた！」と喜びの声を上げた友だちに対して，すぐに「おめでとう」といった言葉が飛び交う一方，試合に夢中になり，ミスをした友だちや審判に文句を言ってしまう姿も見受けられる。メンバーとの連携が図れず傍観しているだけの子や，逆に客観的に状況判断のできる子も現れ始めてくる。このような一人一人の違いだけではなく，個々の子どもの頭と身体と心のバランスを自ら保てるよう指導していくことは重要であると考えている。そのために子どもたちにとって新しい種目を採り上げることは，個人差が軽減され，全員が同じスタートラインに立てる点でメリットがある。まずは，いたわりの気持ちをもって友だちに接し，一緒に楽しく身体を動かす姿。次に，友だちの良いところを認め，得意なことを互いに教えあう姿を目指したい。また，約束やルールを守り安全にゲームをする段階から，ゲーム進行やルールの改善などに積極的に関わる段階へと，子どもたちを育んでいきたい。

②　実践の概要

ホッケーは棒状のスティックを用い，仲間と連携しながらボールを相手ゴールに入れ得点を競うという，シンプルかつ伝統的で奥深い球技の一種である。本来はゴール前の半円エリア内からのシュートし

か認められないが，ここでは児童の安全のため，ゴール前の台形エリアを侵入禁止として，近距離からのシュートを防ぐことにした。さらに，センターに幅２ｍの立ち入り禁止ゾーンを設けて前衛と後衛の役割分担を明確化し，一度に多くの子どもたちが球に群がることがないよう工夫した。正式にはキーパーを含め各チーム６名の選手で戦うが，ここではキーパー２名，ディフェンス２名をおいて守備側の連携プレーの必然性を高めた。また，オフェンスの人数を４名とし，攻守それぞれのメリハリを強め，攻め方や守り方の作戦が重要になるよう工夫した。安全のためにルールを守ることを強く意識させるため，スティックの動かし方を中心に，ファールに対して，イエロー，オレンジ，レッドカード制度を導入し，審判が厳しく対処することを学習課題の1つとして位置づけた。

《学習の流れ》①用具の使い方など，安全に注意しながら，パスやシュートなど基本練習を行う。

②攻守の連携プレーを意識しながら，チーム練習を行う。

③動き方や審判としての役割などを確認しながら，作戦を立てて練習試合を行う。

③　実践を振り返って

◇　シュートを決めた選手だけの活躍ではなく，シュートにつながるパス（アシスト）プレーや，前のキーパーが止めそびれたボールを，もう一人のキーパーが止めた（フォロー）プレーなど，チーム内の連携プレーの良さを評価する声が多く挙げられるようになった。

◇　カード制の導入に伴い，積極的に審判に取り組む姿が見られたが，試合後の話し合いでは，審判の判定のあり方についての意見が多く出された。そのため，審判の果たす役割の重要性や，公平かつ安全にプレーするために必要なルールのあり方など，試合運営に関わる意識の高まりが感じられた。

(3)　高学年（６年）「バスケットボール」（アシストに注目して）

①　目指したい子どもたちの姿

今回，研究テーマにせまるため，「一人一人の違いを受け入れるだけでなく，生かしあう姿」に焦点を当てた。バスケットボールでは，シュートを決めた人がもてはやされる傾向が強い。ただ一人一人の違いを生かしあうには，シュートの得意な人にボールを渡す活躍の仕方もあると気づかせたい。そこで，バスケットボールにもサッカーのように「アシスト」の考え方を導入し，シュートに直接結びつくパスをした子に注目させるよう考えた。

②　実践の概要　　実施：６月から７月　　チーム編成：男女混合の６チーム編成（力の均等化）

リーグ戦は毎時間２試合ずつ。審判や得点係，時計係などは子どもたちでお互いに行う。

試合終了後はチーム記録表に記入，試合を振り返る。その際，勝敗にかかわらず，その日の各チームのＭＶＰを決める。その後，試合の反省を生かすようチーム毎の練習時間をとり，授業の終わりには全員が円形に集まってお互いの顔を見ながら，試合結果や良かったことなどを発表しあった。

指導計画は，次の通り：１時間目にはオリエンテーションやルールの確認，チーム分け

２時間目から９時間目にかけてリーグ戦。

③　実践を振り返って

バスケットボールの授業は昨年に続いて２回目である。子どもたちはルールや練習方法，ゲームのやり方などは理解していたのですぐに試合を始めたが，やはり得意な子がボールを持ち，一人でドリブル，そのままシュートというプレーが多く見られた。そこで，１時間目の振り返りの時に，チームプレーを強調すると同時にサッカーのアシストの考え方をバスケットボールにも導入することを提案した。すると，２時間目の試合から，チーム記録表の「めあて・作戦」の欄に「もっとアシストを増やそう」と記入するチーム，「反省」の欄に「もっとアシストしよう」と記入するチームが出てきた。そして，実際にアシストした子がＭＶＰに選ばれることが多くなった。教師もアシストをした子を試合中にほめ，振り返りの時にも取り上げた。この時点では，試合中にアシストをした子と抱き合って喜ぶ姿が何度も見られ，子どもたちの間に一人一人の違いを生かしあう雰囲気が芽生えていた。しかし，試合数が増える

につれ，「アシスト」という言葉は作戦タイムの時には出てくるものの，チーム記録表には記入されなくなり，子どもたちの興味は次第に勝敗に移っていった。

この実践を振り返ると「アシスト」の意味を子どもたち全員が理解していたかを問い直してみる必要がある。「シュートに直接結びつくパス」と説明しながら，実際に一部の子どもたちにプレーさせたが，サッカーに詳しくない子どもたちの理解には疑問が残る。また，よりアシストを強調するルールの改正も考えられた。例えば，アシストには1点というルールを加え，アシストをしてシュートが決まれば合わせて3点とすれば，もう少しアシストしようという子も増え，最後まで一人一人の違いを生かしあいながらプレーできたかもしれない。次の実践に生かしたい。

4　第71回教育実際指導研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1)　部会として授業改善のために目指したことや，そのための手立て

子どもたちがどのように関わりあいながら，からだを通して一人一人の違いを受け止め，その違いを生かしていこうとするのか，子どもたちの様子をじっくり見守り，考えながら実践を行った。

手立てとしては，低学年では「みんなと一緒に考える」場も作ることで，仲間意識を強めたり，力を合わせたりする姿を目指した。

中学年では，全員が新しい種目に取り組むことで，個人差の軽減を図り，友だちの新たな可能性にも気づく場，苦手意識のある子も意欲的に参加できる場を作った。

高学年では，チームのために自分の役割を果たし，友だちの良いところを生かそうとする姿をめざし，くり返し意識づけを図りながら，お互いの考えや意見を聞きあい，伝えあう時間を確保した。

(2)　具体的な成果や問題点

違いを認めあい，生かしあおうとする気持ちを育むために試行してきた手立ては，小さな成果として子どもたちの関わり合いの中に見られるようになってきた。例えば，友達の活動をよく見て，良いところを伝えようとする姿や直接のシュートだけでなく，シュートにつながるパスを大事にしようとする姿である。

しかし，それが子どものからだにしみ込み，子どもの中から出てくるものになるには，まだ時間がかかると感じている。実際，高学年ではゲームになると「アシストよりは勝敗」と，こちらの思いと子どもたちの現実にギャップが見られているのも事実である。振り返りの場面だけでなく，試合中でもお互いを生かし合う雰囲気を保ち続けるための手立てを考えることも今後の課題の一つである。

(3)　協議会での話題・意見・質問など

・今回の授業提案と新学習指導要領との関係について。ニュースポーツ（タグラグビー・カバディ・キンボール）の導入も提案としては興味深いが，学習指導要領に示されている種目の指導方法についてはどうなのか。その中で，「公共性」のどのような場面が見られるのか。

・アシストのルールなど，違いを排除せずにすむように教師が作りすぎてしまうのではないか。アシストしたくなる気持ちにさせるにはどうしたらよいのか。

・『学びの概要』にあるすもうやレスリングはどのように考え位置づけられているのか。また，実際にどのように行っているのか。（公立では実施の難しさもある）

(4)　協議会を経て今後の課題であると認識したこと

我々の掲げるテーマと協議会に参加してくださる先生方のニーズにギャップがあることがある。今回も話題になったが，学習指導要領との関連である。テーマに沿いながらも，子どもたちの姿をどう捉えているのか，そのためにどのような種目を取り入れ，学習活動としてどう位置づけてきたのか，より具体的に伝えていくことが求められていると思われた。さらに全体テーマ「公共性」に重点を置きすぎ，分野本来の目的である運動量や技能的な面とのバランスが崩れないよう配慮する必要も感じている。